

10月8日

Copyright: Takumin

レジティマシーをどう日本語に訳すか？英語だと非常にクリアーだが日本語にするとある人は正当性と訳すが別の人たちは正統性と訳す。例えば前者をジャスフィティケーションと訳すこともできる。理にかなうように訴えるという表現。後者はアウソリティーと訳すことができる。日本語で書くときこういった混乱が生じる。レジティマシーとは何か？先週簡単に説明したがレジティマシーとは被支配者の同意に基づく権力の認識あるいはある権力に服従しようとする主体的な意思を言う。レジティマシーがあるから義務が生じる。政治権力が正当であるから我々はその権力に対して義務を負うことになる。そして正当性がどこから生じるかという我々の同意から生じる。レジティマシーは上から降ってくるものではなく、我々が主体的に作るものである。ただし上昇テーゼと下降テーゼにレジティマシーを分けることができる。ありとあらゆる社会的、政治的なものは自覚をしていなくても同意に基づいて作られている。従う意志と同意が権力において決定的に重要になる。それがレジティマシー。直接的、間接的という問題がある。要するに王政の場合王様に従うのはそういうものだから、そういう伝統があるから、あるいは処罰されるからといういろんな理由があるかもしれないが人々は従う。よって王制はレジティマシーがあることになる。より直接的なパターンがある。意識的にこの人間に権力を付与するという同意がなされる場合がある。それがデモグラシーのモデルとなる。そうすると先ほどのテーゼが重要になる。上昇テーゼとは被支配者が同意して権力を立ち上げる。要するに下から上に向かうモデルである。もう一つの下降テーゼは上から下へ向かうベクトルが重視されるモデルである。つまり、権力というものは上で生じて下へ向かうんだという発想。レジティマシーは上から来るという考えで、その神様が人間社会のトップに権力を与える。だから王政にはレジティマシーがあると考ええる。そうすると王は神の代理人ということになる。王様は臣民を支配する資格が与えられる。このような二つの異なる言説がある。この二つのレジティマシーのパターンが存在するにもかかわらず、レジティマシーの作用は二つしかない。実は全てのレジティマシーはボトムアップである。支配者が独裁者であろうと同意というのは下から来る。我々がそれを間接的に認めているのである。あるいは神様が権力の源泉であるという言説を作っているのは我々で実は全てのレジティマシーは下から来る。しかしその源泉は二つの言説がある。最終的にはどの言説が最も説得的かということがポイントとなってくる。デモグラシーがいいという人はトップダウンの政治システムというのは誤りである、不正義であると考ええる。唯一正当なシステムは普通の人々が同意するシステムであるとする。かつて、中世においては下降テーゼが支持されていた。神は人間には理解できない明確な目的に基づいてこの世界を作り、人間や社会を作ったとされ、そういう考えが支配的であったためである。どちらの言説を我々が受容するのかということが重要である。これを中心に様々な言説に着目してみる。まず近代国家の定義。ボダンの定義。国家とは、多くの家族、およびそれらに共通に属しているものに関する、主権的権力による正しい統治である。ここで注目すべきは主権である。主権とは近代的概念で、16世紀に非常に重要な政治的概念として認知されるようになる。次にウェーバーの定義。国家とは、ある一定の領域の内部で一この領域という点が特徴なのだが一正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である。ここで注目するのは暴力の肯定。政治と暴力は表裏一体の関係にあると言った

のはマキャベリーが最初であり、ウェーバーは国家の本質として位置付ける。国家とは暴力を独占する。ただし重要なのはその暴力が正当な物理的暴力行使であることである。その正統性は下から来る。もう一は二重の非人格性。国家は近代以前には存在していなかった。もとはマキャベリーのスタートから来る近代の産物であると考えることができる。ステートとは暴力的な権力システムを伴っている。だが、これは非人格的な存在である。近代以前の政治システムと比較すると、中世においては王様や皇帝が支配者で彼らが国であると理解されていた。それがあある意味で前近代的、伝統的な共同体間であった。要するに具体的な人間と権力、国が結びつくということ。今日において我々は特定の人物が社会や政治を体現しているとは思えない。例えば麻生 = 日本ではない。国家は抽象的、非人格的性質を有する。これは近代以前の人から見れば理解しがたい、あるいは不思議なシステムであった。我々はステートという非人格的なものを重視し、これを国民が受容している。さらに国のために死ねと命令された場合多くの人は国家という抽象的な存在に命をささげる。国民もステートと一緒にではない。我々イコール国民、国家ではない。いずれはメンバーが変わり不変のものでないし、国家とは抽象的なものである。国民が国家と結びつくが同じではないということであり、そういう意味で国家とは非人格的な存在である。我々は国家システムを受容しているにすぎない。だから二重の意味で非人格的である。国家があると我々は想定して国家のシステムを共同で受容することによってこのシステムが機能することになる非常に不思議なメカニズムであるといつてよい。最後のシュミットの引用。中性国家。一つは国家は抽象的な存在ということ。もう一つは国家は特定の価値、内面的価値に関与しないということ。どういことかということ近代以前の国家では王の信仰が国民に強要されていた。ともかく、王様が臣民の内面にも立ち入れるのが当たり前とされていた。そうすると宗教面での対立から宗教戦争が発生した。主権によって国家を治め、主権者とは最高の立法権を有することになる。主権者の命令には絶対に従わなければならないという定義はこの時代に作られた。これにより宗教戦争が解決された。つまり国家は中世的な存在であるとした。国に従うのは外面的行為であり、内面には立ち入らないということとなった。これが主権の原理であり、近代国家の本質と言えるものである。主権は内面に立ち入らないという面で寛容な原理であると考えられる。具体的に言うと、フランスではカトリックの教義をプロテスタントに強要しない代わりに外面的行為に関しては我々がすべて規制しますよ、つまり税金やその他の義務は尊重しなさいというもの。今の説明はすべて近代国家に関するものである。

本講義の主題は近代国家を構成する諸要因、諸原理がどこからどのように発生したかということである。では近代的でない政治社会がどのような特徴を有していたかを理解し、その返還プロセスをたどっていく。その際に注目するのが代表という言葉である。一口に代表といってもその意味は多種多様で、いろんな面に注目せねばならない。権力が上から来るといった場合、我々は往々にしてそれを神聖視することがある。人々が主体的にそう信じた場合、そのイメージが固定化、現実化する。そうでなく、デモグラシーを積極的に受容する場合はすべては人工的であることをまづ自覚し、作為の論理を重視することになる。社会は人為的な同意に基づいてフィクションにすぎないという考えを受け入れるが、その際に国家を神聖視することはない。何か問題が生じると我々

が対処しなければならないとして、現実積極的に働きかけることになる。なぜ我々が価値観を受容するのか？我々の世界はある種のフィクションによって規定されている。だからと言って何でもありというわけではない。世の中には信ぴょう性のあるフィクションとそうでないものがある。例えばお金に価値があると信じて我々はそれを用いる。そこには同意がある。政治の場合も現実をどうとらえるかによって現実が変わってくる。その際に説得的な言説とは何かを理解するためにはさまざまな言説に着目し、なぜ多くの人々に受容されたのか、されなかったのか、廃れていったのかということを説明していかなければならない。ここで重視するのは単なるシステムやロジックではなく、メタファーである。我々がある一定のシステムの信ぴょう性、信頼性を認める際にはそれが合理的であるとかロジックとして正しいからという風に一元的には理解しない。ロジックだけでなく、非合理的な言葉でうまく表現できないようなシンボルが政治や現象を構成することがあり、そこにも着目していきたい。現実の政治でロジックと非ロジックはどう融合し、現実を規定していくのかというプロセスに着目していく。その際に表象としてのレプレゼンテーションを見ていく。